



スポーツと地球環境の これからの関係を考える

公益財団法人

ラグビーワールドカップ2019組織委員会

JRFU連携・レガシー局 JRFU連携部長

(兼) 管理局 秘書室 部長

福島 弦氏



—— いよいよラグビーワールドカップ2019日本大会が9月に開幕しますが、どのような大会を目指していますか。

ラグビーの母国ではない日本で、ある程度コンパクトに開催することは、重要なテーマだと考えています。新設スタジアムは釜石のみ、スタジアムを改修する花園や熊谷の他は、現在の施設を使用するコンパクトな大会になっています。そして、約7週間の大会期間中、全国12箇所のスタジアムを4～50万人が訪れ、試合中継は4～50億人が観戦する、世界でも最大規模のスポーツイベントがもたらす日本への経済効果はとても大きい。多くの外国人が日本の各地域を訪れるインバウンド効果で、地域経済を活性化できます。ローカルとグローバルをつなげることは、この大会の大きな意義です。

そして子供達が、ラグビーというスポーツのルールの中で身体をぶつける

ことを体感し、試合後に握手する選手の姿を見て、融和を学び、その在り方を記憶に残す。私自身もラグビーの価値を信じており、それこそが日本でワールドカップを実施する価値であり、レガシーだと確信しています。

—— 唯一新設した釜石鶴住居復興スタジアム、および釜石が目指す姿について教えてください。

このスタジアムは、東日本大震災で津波が直撃した鶴住居小学校と釜石東中学校の跡地に建設され、防災意識向上の役割を担っています。常設席は、尾崎半島の大規模林野火災の被害木を材料とした木製シートの他、東京ドーム他から寄贈を受けたシートによる「絆シート」です。多くのラグビーファンがワールドカップを機に集まることで、「釜石」のSDGsに沿ったスタジアム運営、地域が有する豊かな自然資源を世界にアピールできるまたとないチャンスと捉えています。また、釜石における復興のプロセスは、自然再生のプロセスでもあります。森と海と山と川に囲まれ環境に配慮したスタジアムとして、今後のモデルとなることも期待しています。



豊かな自然に囲まれた釜石鶴住居復興スタジアム
(釜石市ホームページより)

—— スポーツイベントと持続可能性についてのお考えをお聞かせください。

これからは、スポーツイベントも地球環境や気候変動と無縁ではいけないと思っています。試合会場で、例えばリユースカップに出会うことが、環境問題を考えるきっかけになるかもしれない。スポーツも環境問題に対するアプローチのひとつとして十分にあり得ると思います。

スポーツイベントの実施は、地球環境だけを考えると負荷になるかもしれませんが、ラグビーというスポーツによって青少年の健全な精神性を育むことが、広く地球のことを考えられる地球人としての能力を高めることにつながっていくのではないかと考えています。大会が無事に成功することが第一、その中で私は何のための大会か、という問いに答えをつくる仕事です。ラグビーワールドカップ2019日本大会がスポーツと持続可能性の関係を考える転換点になってほしいと願っています。

[聞き手：つな環編集部]

福島 弦 (ふくしま げん)

北海道札幌市出身。高校からラグビーを始め東京大学に入学後、金融政策を専門に勉強しながら、ラグビーの社会人クラブチームに参加。大手コンサルティング会社に就職し、海外プロジェクト等を手掛け4年後に同社を退職。ラグビー日本代表U20のチームマネージャー等を経て、2017年よりラグビーワールドカップ2019日本大会の開催準備に従事している。